令和５年度かづの市未来アカデミー創造事業・武蔵野大学発展 FS
「鹿角市中心市街地に必要な魅力」報告書

武蔵野大学経営学部経営学科　小暮眞人

執筆協力

文学部日本文学文化学科２年　奥田春
文学部日本文学文化学科２年　押田怜奈
文学部日本文学文化学科２年　伊藤楓
グローバル学部日本語コミュニケーション学科３年　谷本琴美
法学部政治学科３年　篠原菫
法学部政治学科３年　高田遼
法学部政治学科３年　加納莉央
法学部政治学科２年　間中俊輝
経済学部経済学科２年　柳樂貴一
経営学部経営学科４年　片平理子
経営学部経営学科３年　長谷川大和
工学部環境システム学科４年　谷沢香凜
工学部環境システム学科２年　林利咲
工学部建築デザイン学科２年　竹田結

（概要）

本報告書は、令和５年８月に実施した発展フィールド・スタディーズ「鹿角市中心市街地」の実施結果についてまとめたものである。武蔵野大学と鹿角市は令和２年に包括連携協定を締結し、地方創生にかかる共同研究を進めている。本職においては、鹿角市の中高生と武蔵野大学の学生によるワークショップを行い、中高生の定住意向が低い、中心市街地の賑わいの喪失、高等教育機関がないというトリレンマを解決するという試みである。令和３年度はオンラインで開催し、昨年は初めてリアルに中高生と大学生が対話を重ね、鹿角市全体の魅力、U ターンの課題など一定の成果を得ることができた。しかし、中心市街地の活性化という点では、今一つ踏み込みが足りなかった。今年度は、これまでの成果と課題を踏まえ、「中心市街地の魅力」にフォーカスして実施した。一昨年度より昨年度、昨年度より今年度と年々、このプログラムに参加する中高生、大学生が増えており、関心は高まりつつある。今後は、今回整理された中心市街地の魅力をどのように具現化するかが課題となる。

１．中心市街地

1.1　中心市街地活性化法

全国各地で駅前商店街の衰退が著しい。特に、商店街の衰退が顕著になったのはバブル経済崩壊後である。そこで国は 1998（平成 10）年に中心市街地活性化法をつくり、現在も全国の中心市街地支援を展開している。

中心市街地活性化法
（平成10年6月3日法律第92号）

中心市街地活性化法

- 第二条　この法律による措置は、都市の中心の市街地であって、次に掲げる要件に該当するもの（以下「中心市街地」という。）について講じられるものとする。
- 一　当該市街地に、相当数の小売商業者が集積し、及び都市機能が相当程度集積しており、その存在している市町村の中心としての役割を果たしている市街地であること。
- 二　当該市街地の土地利用及び商業活動の状況等からみて、機能的な都市活動の確保又は経済活力の維持に支障を生じ、又は生ずるおそれがあると認められる市街地であること。
- 三　当該市街地における都市機能の増進及び経済活力の向上を総合的かつ一体的に推進することが、当該市街地の存在する市町村及びその周辺の地域の発展にとって有効かつ適切であると認められること。

ところで、「中心市街地」とは、中心市街地活性化法により生まれた概念である。例えば広辞苑には「中心市街地」の説明がないので熟語としてまだ定着していない。つまり、日本語としては「中心」と「市街地」の合成語になる。

この法律では中心市街地を「小売商業者」及び「都市機能」が集積し、さらにその自治体で「中心としての役割」を担っている市街地としている。小売商業者及び都市機能については定義がある程度、明確であるが、「中心としての役割」となると、当該自治体における政策決定者の意思に委ねられている。さらに区市町村が中心市街地として申請しても国が認定するかどうかという問題もある。

2006（平成 18）年度に事業がスタートし、これまでに 153 団体（2023 年 9 月 25 日現在）が認定されているが、全国には 2023 年 9 月 25 日現在 1724 の市区町村があるので認定を受けた団体は 1 割にも満たない。つまり、全国に中心市街地活性化法の適用を受けていない中心市街地がたくさんあるということである。その一つが秋田県鹿角市の中心市街地である。

1.2　地方都市と東京の中心市街地

地方と東京を対比した場合、地方の中心市街地の衰退は著しい。こうした観点から中心市街地活性化法の認定も地方都市が多くなっていることは合理性がある。つまり、東京対地方という賑わいを巡る対峙を背景に中心市街地問題は東京以外のほとんどの市町村が抱えており、その解決が日本の大きなテーマとなっているのである。したがって、国の支援がなくても、中心市街地を抱えている市町村は、独自に中心市街地振興策を行っている。

秋田県鹿角市

青森県弘前市

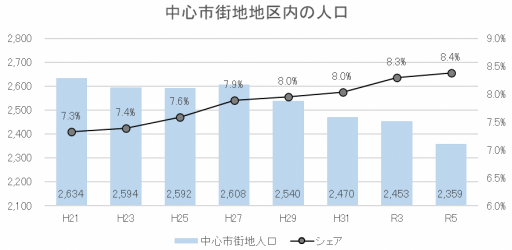
東京都中央区

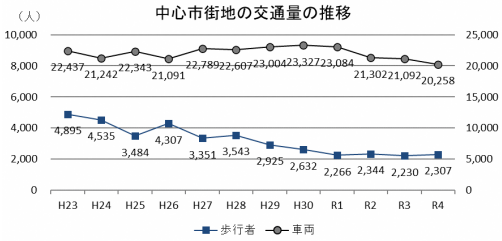
２．鹿角市の中心市街地

2.1　中心市街地の現状

鹿角市は歴史的に鉱山町として発展してきた。人口のピークは、1955（昭和30）年の60,475人でその後、日本が高度成長期にあったことから都会への人口流出が始まり、1978（昭和53）年に尾去沢鉱山が閉山すると生産年齢人口の減少に拍車がかかり、現在は27,906人（令和5年8月31日）となっている。

鹿角市の中心市街地は、下図のエリアで４つの商店街があり、福祉保健センターやコモッセなどの公共施設、JR鹿角花輪駅や道の駅あんとらあ、金融機関や病院、歴史・文化施設等が集積している。尾去沢鉱山が稼働していた頃の中心市街地には商店が林立し、商店街の裏筋にも繁華街が広がっていた。現在、中心市街地の人口、人流ともに減少し、空き店舗が増加しており、商業環境としては大変厳しい状況に置かれている。

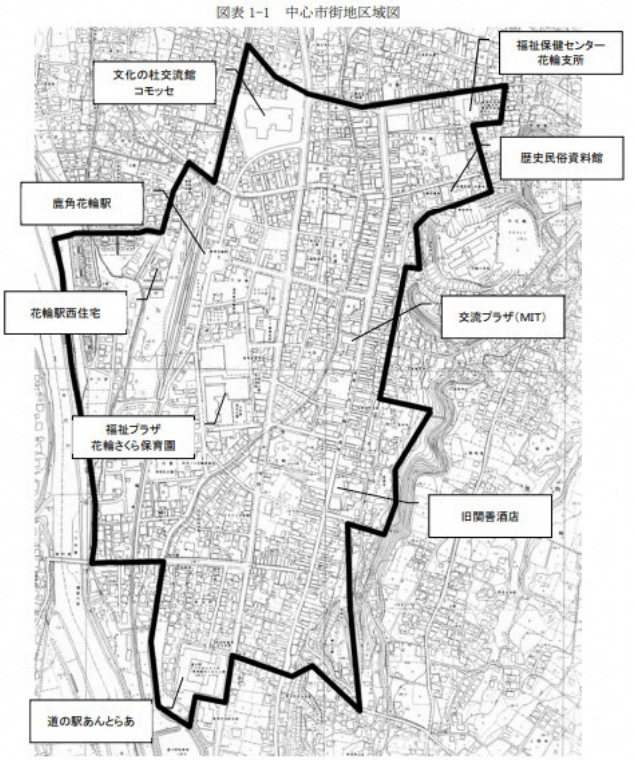




空き店舗数の推移

商店街	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
大 町	9	10	11	12	17	16	14	15	17	17	18	18	18
新 町	2	3	3	4	5	5	5	6	5	5	8	7	5
谷地田	8	8	7	6	2	2	4	3	3	3	3	4	4
花通り	4	5	5	7	9	10	9	10	11	9	11	21	21
合 計	23	26	26	29	33	33	32	34	36	34	40	50	48

図表 1-1　中心市街地区域図



2.2　鹿角市中心市街地活性化プラン

鹿角市では中心市街地の状況を踏まえて、2010（平成 22）年に中心市街地活性化プランを策定し、中心市街地活性化に取り組んでいる。2022（令和 4）年に改定した鹿角市中心市街地活性化プランでは「多世代が安心して暮らせるまちなか」、「人が行き交う訪れたくなるまちなか」の二つを基本方針として掲げ、中心市街地に人流を取り戻そうとしている。具体的には、定住人口を増やす、商業・業務機能を維持・誘導する、地域資源を生かした来街機会を創るという取り組みのほか、交通利便性の向上、観光資源のブラシュアップ、ビジネス拠点づくりを進めてきた。

この間の実績として、定住人口増加策では花輪駅西住宅整備、空き家を活用した定住支援を行い、商業・業務機能では各種補助制度とともに、ほぼ全ての業種を対象に起業・創業支援事業にも踏み込んだ。また、コモッセ、福祉プラザなどは市民の交流拠点となっており、循環バス、道の駅、コワーキングスペースを備えたレンタルオフィスも地域資源を生かすと

いう部分では機能している。

しかしながら、中心市街地の賑わいは、依然として厳しい状況に置かれている。

３．ワークショップ

以上の状況を踏まえて、2021（令和 3）年から武蔵野大学の学生と鹿角市の中高生で鹿角市の中心市街地問題を考えるワークショップを行ってきた。

１年目は、プログラムに参加した鹿角市の中高生から「大学がない、働きたい仕事がない、遊ぶ場所がないから鹿角を離れざるを得ない」という率直な意見があった。若者の定住意向を高める対策として大きな示唆は得られたが、一方で中心市街地の活性化については正対できなかった。コロナ禍の影響でオンライン開催となったこともあり、参加者のダイアログの深まりという点では限界があった。

２年目は、鹿角市の中心市街地の現状等について鹿角市の担当者によるストーリー・テリングを行い、中高生と学生が中心市街地の未来を考えるフューチャーセッションを行い、「鹿角市から転出した人たちが戻ってくるという将来像」を描いた。そして「自然」、「歴史」、「文化」、「観光」、「仕事」、「情報発信」、「交通利便性」、「居場所」などに係る課題と解決策が提案されたが、これらは中心市街地問題というよりは鹿角市全体の課題となった。

２年間を総括すると、鹿角市の中高生が定住意向を高めること、具体的には進学、就職等で鹿角市を一度、離れても、いつかふるさと鹿角に戻ってくる課題、Uターン支援では一定の成果が見られるが、中心市街地問題の解決については、依然として不十分であった。

そこで、今年度は「鹿角市の中心市街地問題」という抽象的な問題提起でなく「鹿角市の中心市街地の魅力問題」として具体的に魅力が何なのかについてフューチャーセッションを実施した。取り組みが鹿角市及び武蔵野大学でも浸透してきたこともあり、鹿角市の中高生 10 名、武蔵野大学の学生 14 名と、それぞれ 2022 年度の倍の参加を得て実施することができた。

４　令和 5 年度プログラムの概要

4.1　期間

令和 5 年 8 月 6 日（日）～13 日（日）

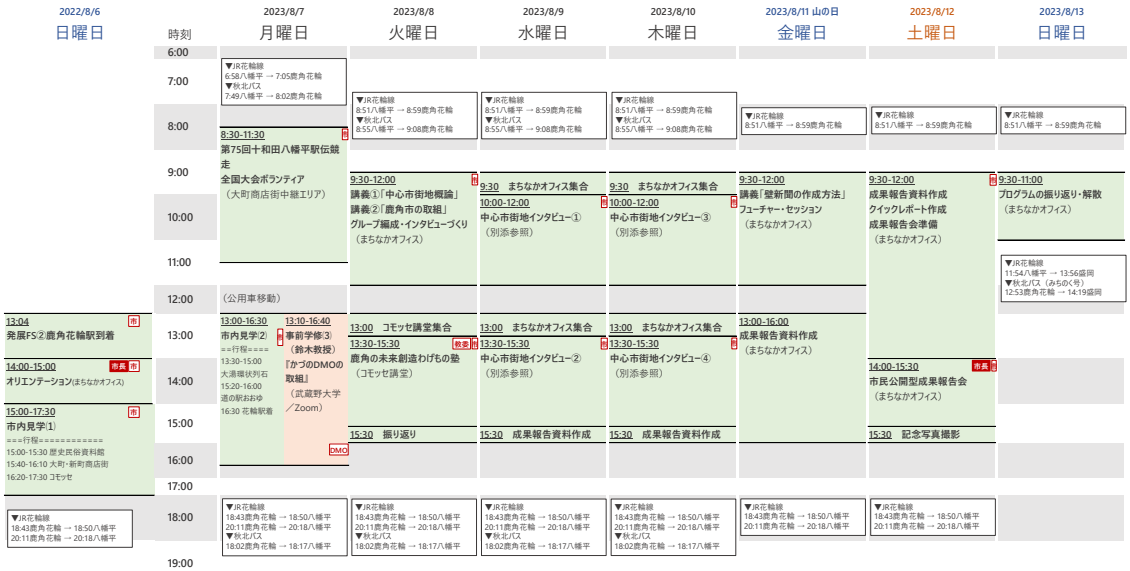
※中高生の参加は 8 日（火）～12 日（土）5 日間

4.2　参加者

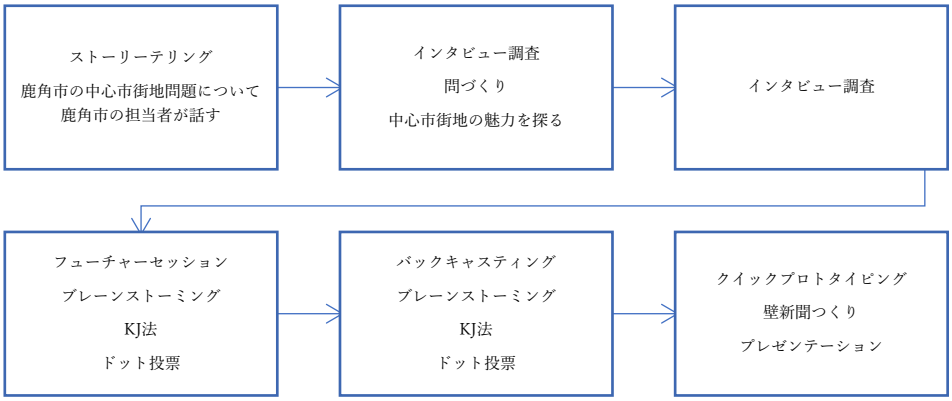
武蔵野大学	鹿角市
文学部日本文学文化学科２年　奥田春	秋田県立花輪高等学校３年　泉山健太
文学部日本文学文化学科２年　押田怜奈	秋田県立花輪高等学校３年　根本将之介
文学部日本文学文化学科２年　伊藤楓	秋田県立花輪高等学校３年　根本竜之介
グローバル学部日本語コミュニケーション学科３年	秋田県立花輪高等学校２年　浅水春華
谷本琴美	秋田県立花輪高等学校２年　川上ひかる

法学部政治学科３年　篠原菫	秋田県立大館鳳鳴高等学校１年　安保美優
法学部政治学科３年　高田遼	秋田県立十和田高等学校１年　高瀬千晶
法学部政治学科３年　加納莉央	鹿角市立十和田中学校３年　田中風月
法学部政治学科２年　間中俊輝	鹿角市立八幡平中学校３年　海沼実羽
経済学部経済学科２年　柳樂貴一	鹿角市立十和田中学校２年　成田裕帆
経営学部経営学科４年　片平理子	
経営学部経営学科３年　長谷川大和	
工学部環境システム学科４年　谷沢香凜	
工学部環境システム学科２年　林利咲	
工学部建築デザイン学科２年　竹田結	

4.3　プログラム全体日程及び内容



5　ワークショップ



6　ストーリー・テリング

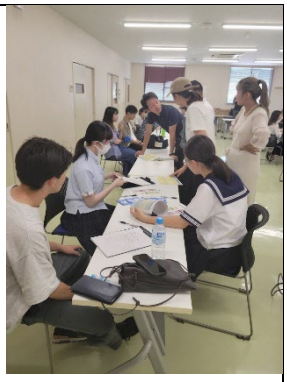
武蔵野大学小暮が日本の中心市街地問題について、鹿角市総務部政策企画課海沼主査が鹿角市の中心市街地問題について、参加者に語った。（資料省略）

7　インタビュー調査

7.1　インタビューチーム編成及び問づくり

インタビュー組み合わせ（1班、3人体制）

A		B		C		D		E		F		G		H	
K3	根本将之介	K3	泉山健太	K3	根本竜之介	K2	浅水春華	K2	川上ひかる	K1	安保美優	K2	成田裕帆	K1	高瀬千晶
D2	竹田結	D4	片平理子	D3	篠原董	C3	海沼実羽	D3	加納莉央	D4	谷沢香凜	D3	長谷川大和	C3	田中風月
D2	伊藤楓	D2	押田怜奈	D2	奥田春	D2	柳樂貴一	D2	間中俊輝			D3	谷本琴美	D3	高田遼



問づくり

調査票

鹿角市中心市街地の魅力に係るアンケート調査（A 班）

（中心市街地について）

1. 鹿角市の中心市街地がどこかご存知ですか？
   ①知っている　②知らない

2. 中心市街地で魅力を感じるものはどれですか？（複数回答可）
   ①買い物　②飲食　③仕事　④通院　⑤イベント・催事　⑥散歩・ジョギング
   ⑦銀行・郵便　⑧公共施設利用　⑨理美容
   ⑩その他
   （＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

3. 中心市街地の小売店に求めるものは何ですか？（複数回答可）
   ①新しい商品・サービス　②日常生活で必要な商品・サービス
   ③趣味、嗜好で求める商品・サービス　④鹿角市の特産品、名産品
   ⑤流行やトレンドなどの情報　⑥鹿角市に係る情報
   ⑦その他
   （＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

4. 3 で選択したお答えいただいた選択肢に関して、具体的なイメージを教えてください。

5. お祭りをどう思っているか。（ねぶた）

6. 商店街に足りないものは何か。（手軽に食べれる飲食店とか）

（回答者について）

1. 住所
   ①鹿角市花輪地区　②鹿角市十和田地区　③鹿角市尾去沢地区　④鹿角市八幡平地区
   ⑤秋田県の他市町村　⑥近隣県（青森県、岩手県、宮城県、新潟県、福島県）
   ⑦東京圏（東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県）
   ⑧その他（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

2. 性別
   ①男　②女　③その他

3. 年齢
   ①20 歳未満　②20 歳代　③30 歳代　④40 歳代　⑤50 歳代　⑥60 歳代
   ⑦70 歳代以上

4. 職業
   ①自営業（商店主、個人経営者など）　②自由業（開業医、弁護士、芸術家など）
   ③管理職（企業の課長以上の役職者など）④事務職（一般事務、営業職など）
   ⑤専門職（看護師、教員、技術者、研究員など）
   ⑥労務職・サービス職（工場勤務、建設作業従事、運転手、販売員、理美容師など）
   ⑦パート・アルバイト ⑧専業主婦（夫）⑨学生　⑩無職　⑪その他

（調査員）

1. 氏名

2. 調査地点

3. 調査地点の感想

7.2　チーム別インタビュー先・日程

街頭インタビュー日程表（1日目）　資料3

日時		A班	B班	C班	D班	E班	F班	G班	H班
8/9（水）	10:00～12:00	秋田県立花輪高等学校 ▽大学進学や就職を目指して学習に励むとともに、部活動や生徒会活動にも積極的に取り組んでいる。 住所:花輪字荒宝長根12 電話:0186-23-2126 INT先:生徒、教員	道の駅かづの あんとらあ ▽特産品や郷土料理、花輪ばやしといった、鹿角の魅力を満喫できる施設。 住所:花輪字新田町11-4 電話:0186-22-0555 INT先:一般客(市民、観光客)	①鹿角花輪駅 ▽盛岡市と大館市を結ぶ花輪線所属駅で、盛岡駅・仙台駅・関東方面及び大館市方面の高速バスの他、路線バスが乗車する鹿角市の交通の拠点。 住所:花輪字下中島10 電話:0186-23-3412（鹿角花輪駅）019-625-4012（JR盛岡支社広報担当） INT先:一般客(市民) ※駅構内は立入禁止 ②鹿角市立花輪市民プール ▽子どもたちが楽しめる市民プール。 住所:花輪字上中島20-1 電話:0186-30-0297 連絡先:市スポーツ振興課 INT先:利用者(市民)	いとく鹿角ショッピングセンター ▽市内最大のショッピングセンター。 住所:花輪字下夕町164-1 電話:0186- 30-1166 INT先:一般客(市民)	道の駅かづの あんとらあ ▽特産品や郷土料理、花輪ばやしといった、鹿角の魅力を満喫できる施設。 住所:花輪字新田町11-4 電話:0186-22-0555 INT先:一般客(市民、観光客)	いとく鹿角ショッピングセンター ▽市内最大のショッピングセンター。 住所:花輪字下夕町164-1 電話:0186- 30-1166 INT先:一般客(市民)	道の駅おおゆ ▽市の産業・伝統・資源・人という魅力財産を、他地域の人・商圏と繋ぎ、一つの輪にする。 住所:十和田大湯字中谷地14 電話:0186-22-4184 INT先:一般客(市民、観光客) 〈往路移動〉市公用車	秋田県立十和田高校 ▽地域に対する幅広い調査研究活動やボランティア活動、屯馬内祭囃子への参加などを通して、社会を支える自覚と高いおもを身に付ける学びに取り組んでいる。 住所:十和田屯馬内字下南畑9 電話:0186-35-2062 INT先:生徒、教員 〈往路移動〉タクシー
		昼休憩							
	13:30～15:30	文化の杜交流館コモッセ ▽中心市街地の拠点施設。まちなかの賑わい創出を図る役割を担う。 住所:花輪字八正寺13 電話:0186- 30-0293 INT先:利用者(市民)	道の駅かづの あんとらあ ▽特産品や郷土料理、花輪ばやしといった、鹿角の魅力を満喫できる施設。 住所:花輪字新田町11-4 電話:0186-22-0555 INT先:一般客(市民、観光客)	①かづの花通り商店街 ▽鹿角花輪駅前に隣接し、駅前商店街として駅前再開発に関する研究や提言の作成等を行い、駅前イベントにも力を注いでいる。 住所:花輪字下中島12-2近辺 電話:0186-25-8739（090-7334-5143） INT先:市民、店主 ②谷地田町商店街 ▽鹿角花輪駅から徒歩5分の商店街。 住所:花輪字上花輪145近辺 INT先:市民、店主	いとく鹿角ショッピングセンター ▽市内最大のショッピングセンター。 住所:花輪字下夕町164-1 電話:0186- 30-1166 INT先:一般客(市民)	道の駅かづの あんとらあ ▽特産品や郷土料理、花輪ばやしといった、鹿角の魅力を満喫できる施設。 住所:花輪字新田町11-4 電話:0186-22-0555 INT先:一般客(市民、観光客)	いとく鹿角ショッピングセンター ▽市内最大のショッピングセンター。 住所:花輪字下夕町164-1 電話:0186- 30-1166 INT先:一般客(市民)	道の駅おおゆ ▽市の産業・伝統・資源・人という魅力財産を、他地域の人・商圏と繋ぎ、一つの輪にする。 住所:十和田大湯字中谷地14 電話:0186-22-4184 INT先:一般客(市民、観光客) 〈復路移動〉市公用車	①屯馬内商店街 ▽十和田南駅、東北自動車道十和田Icから近い商店街 住所:十和田屯馬内字屯馬内7近辺 電話:0186-35-3024 INT先:市民、店主 ②十和田市民センター ▽地域全体の課題解決や、活性化の拠点。市の支所も設置。 住所:十和田屯馬内字城ノ下7-5 電話:0186-35-3045 INT先:利用者(市民) 〈復路移動〉タクシー

街頭インタビュー日程表（2日目）

日時	A班	B班	C班	D班	E班	F班	G班	H班
8/10（木） 10:00～12:00	いとく鹿角ショッピングセンター ▽市内最大のショッピングセンター。 住所:花輪字下夕町164-1 電話:0186- 30-1166 INT先:一般客(市民)	ユニバースも馬内店 ▽北海道、東北、北関東に広がる地域密着型のスーパーマーケットチェーン。 住所:十和田毛馬内字中陣場101 電話:0186-30-3232 INT先:一般客(市民) （往路移動）タクシー	道の駅おおゆ ▽市の産業・伝統・資源・人という魅力財産を、他地域の人・商圏と繋ぎ、一つの輪にする。 住所:大湯字中谷地14 電話:0186-22-4184 INT先:一般客(市民、観光客) （往路移動）市公用車	道の駅かづの あんとらあ ▽特産品や郷土料理、花輪ばやしといった、鹿角の魅力を凝縮できる施設。 住所:花輪字新田町11-4 電話:0186-22-0555 INT先:一般客(市民、観光客)	いとく花輪店 ▽鹿角花輪駅から徒歩3分に位置するスーパーマーケット。 住所:花輪字上花輪88 電話:0186-22-0011 INT先:一般客(市民)	①鹿角市福祉プラザ ▽子育て・高齢者・障がい者支援を一体的・総合的に実施。 住所:花輪字上中島93 電話:0186-30-0557 INT先:利用者(市民) ②花輪さくら保育園 児童健全育成事業や、子育て支援事業を行う認可保育園。 住所:花輪字上中島93 ③まちなか児童クラブ 児童健全育成事業や、子育て支援事業を行う認可保育園 住所:花輪字上中島118	文化の杜交流館コモッセ ▽中心市街地の風点施設。まちなかの賑わい創出を図る役割を担う。 住所:花輪字八正寺13 電話:0186- 30-0293 INT先:利用者(市民)	いとく鹿角ショッピングセンター ▽市内最大のショッピングセンター。 住所:花輪字下夕町164-1 電話:0186- 30-1166 INT先:一般客(市民)
昼休憩								
13:30～15:30	いとく鹿角ショッピングセンター ▽市内最大のショッピングセンター。 住所:花輪字下夕町164-1 電話:0186- 30-1166 INT先:一般客(市民)	①毛馬内商店街 ▽十和田南駅、東北自動車道十和田ICから近い商店街。 住所:十和田毛馬内字毛馬内7近辺 電話:0186-35-3024 INT先:市民、店主 ②十和田市民センター ▽地域全体の課題解決や、活性化の拠点。市の支所も設置。 住所:十和田毛馬内字城ノ下7-5 電話:0186-35-3045 INT先:利用者(市民) （復路移動）タクシー	道の駅おおゆ ▽市の産業・伝統・資源・人という魅力財産を、他地域の人・商圏と繋ぎ、一つの輪にする。 住所:大湯字中谷地14 電話:0186-22-4184 INT先:一般客(市民、観光客) （復路移動）市公用車	道の駅かづの あんとらあ ▽特産品や郷土料理、花輪ばやしといった、鹿角の魅力を凝縮できる施設。 住所:花輪字新田町11-4 電話:0186-22-0555 INT先:一般客(市民、観光客)	鹿角市福祉保健センター ▽市の健康・福祉・介護・子育て部門を担う。 住所:花輪字下花輪50 電話:0186-30-0233 INT先:利用者(市民)	アルパス ▽全国規模のスキー大会が開催される東北随一のスポーツ複合施設。 住所:花輪字百合沢81-1 電話:0186-23-8000 INT先:利用者(市民) （往路移動）タクシー （復路移動）タクシー	①新町商店街 ▽「キララ新町」という愛称の地域密着の商店街の一つ。 住所:花輪字下花輪168-2近辺 電話:0186-23-3053 INT先:市民、店主 ②大町商店街 ▽鹿角花輪駅から徒歩3分に位置し、街区延長220m鹿角市の交通要地に位置し、古くから鹿角地区の中心商店街として栄えた。 住所:花輪字中花輪120-2近辺 電話:0186-22-0055 INT先:市民、店主	いとく鹿角ショッピングセンター ▽市内最大のショッピングセンター。 住所:花輪字下夕町164-1 電話:0186- 30-1166 INT先:一般客(市民)

インタビュー

インタビュー

8　フューチャーセッション、バックキャスティング

インタビューから得られた気づきから中心市街地の魅力を描く、さらに描いた魅力から現状の課題を抽出し、中心市街地の魅力を具体化するアイデアをまとめた。

ワークショップ組合せ（１班、4～5人）

A		B		C		D		E	
K3	泉山健太	K3	根本将之介	K3	根本竜之介	K2	浅水春華	K2	川上ひかる
K1	安保美優	K2	成田裕帆	C3	田中風月	C3	海沼実羽	K1	高瀬千晶
D3	谷本琴美	D4	片平理子	D3	篠原菫	D3	高田遼	D4	谷沢香凜
D2	竹田結	D3	長谷川大和	D2	柳樂貴一	D2	奥田春	D3	加納莉央
		D2	伊藤楓	D2	押田怜奈	D2	林利咲	D2	間中俊輝

フューチャーセッション

フューチャーセッション

バックキャスティング

バックキャスティング

9　クイックプロトタイピング

フューチャーセッション、バックキャスティングから描かれた中心市街地の魅力、その魅力に対する課題、魅力を実現するためのアイデアを速報の形で発表するもので、いわゆる壁新聞のようなものである。実際の成果物は、資料として添付した。

作成

発表

10　鹿角市の中心市街地の魅力とその実現のために

各班のワークショップの成果は次のとおりである。

A 班「めざせ！ルンルン　ランラン商店街～しったげ魅力ある町　鹿角～」

A 班は、中心市街地の将来像を「めざせ！ルンルン　ランラン商店街～しったげ魅力ある町　鹿角～」とし、理想のまちとして活気があり、見映えが良い都市像を描いた。その都市像に対し、現在、不足するものとしてハードとソフトの課題を抽出した。ハード面では、必要な施設がないことと、施設が老朽化しているという課題に整理し、ソフト面では情報不足と雰囲気を課題として挙げた。これらの課題解決のために、若者が欲しい施設をつくる、鹿角の特産品などを扱う期間限定ショップ、自家用車利用者が多いことに着目したドライブスルー制度、街歩きのための商店街マップをつくる、情報発信力を向上するためのピクトグラムの修正、SNS での PR などを挙げた。

B 班「かづのアンサンブル～人が集まるまちを目指して～」

B 班の挙げた中心市街地の将来像は「かづのアンサンブル～人が集まるまちを目指して～」で、その将来像を実現するための課題を運営体制、食イベント、店の工夫の 3 点に集約した。さらに中心市街地の魅力として花輪ねぷた、花輪ばやしなどの鹿角ならではのイベント、きりたんぽ、鹿角ホルモン、北限の桃などの特産品、鹿角の人の優しさ、おすそ分け文化を挙げている。中心市街地で特産品を扱うイベントを鹿角の人が中心となって展開することを提案している。

C 班「人々で賑わう花輪へ～誰もが来たくなる街づくり～」

C 班は、「人々で賑わう花輪へ～誰もが来たくなる街づくり～」を将来像として掲げ、空き店舗や空き地が多いこと、賑わいや情報の不足、住民ニーズにマッチングした店舗、施設が少ないことを課題として挙げた。こうした課題を解決するために、商店街でイベントを実施すること、各世代が利用したくなる新しい施設やサービスを提案している。空き店舗を利用した期間限定のショップ、集客施設でのチラシ配布、ラジオや SNS の活用したイベント PR などは注目できる。具体的には中高生が学校帰りなどにスポーツができる施設、シニア向けのリサイクルショップや洋服屋、家族が過ごせる場所やイベントである。特に、鹿角の特産品を使った地元の人向けの食べ歩きイベントの提案は、人口減少しても地域の持続可能性を高める内発的発展の思想とも合致している。

D 班「人が戻りたくなる街づくり」

D 班は、中心市街地の課題として「人が戻りたくなる街づくり」とし、その将来像を「鹿角市の特産物で中心市街地を明るく」、「子育てしやすい環境」を描く。具体的には、中心市街地で鹿角の特産品を味わえる場所がない、交通手段が少ない、子どもが思い切り遊べるところが少ないという 3 点の課題をあげた。解決策として月 1 回、鹿角特産品市を開催する、中高生が放課後立ち寄れるお店づくり、自転車やキックボードのレンタル、安心・安全な遊び場づくりを提案している。

E 班「商店街を全世代が集う場へ」

E 班は、「商店街を全世代が集う場へ」を将来像とし、世代別に足りていないものを挙げている。今回のインタビューで様々な世代の声を聴くことができ、世代別にニーズの違いがあることに着目したものである。例えば高齢者は、気楽に立ち寄り、様々な人と話せる場所や体を動かす場所を必要としており、若者は遊ぶ場所が少ないと感じている。また、子育て世代にとっては、子供が安心・安全に遊べる場所や親子で過ごせる場所、イベント、お店が少ないという問題がある。駐車場不足は、全世代に共通した課題となっている。そして、これらの課題を解決するために、中心市街地の空き店舗を活用することを提案している。アクセサリーショップ、カラオケ、ファストフード、ファミレスなど様々な可能性を模索し、さらに世代別にセグメントしている。三世代に共通した中心市街地の魅力を具体化するもの

として、ファミレス、ファストフード店、駐車場、洋服屋、映画館を提案している。

11　中心市街地の魅力の具体化に向けて

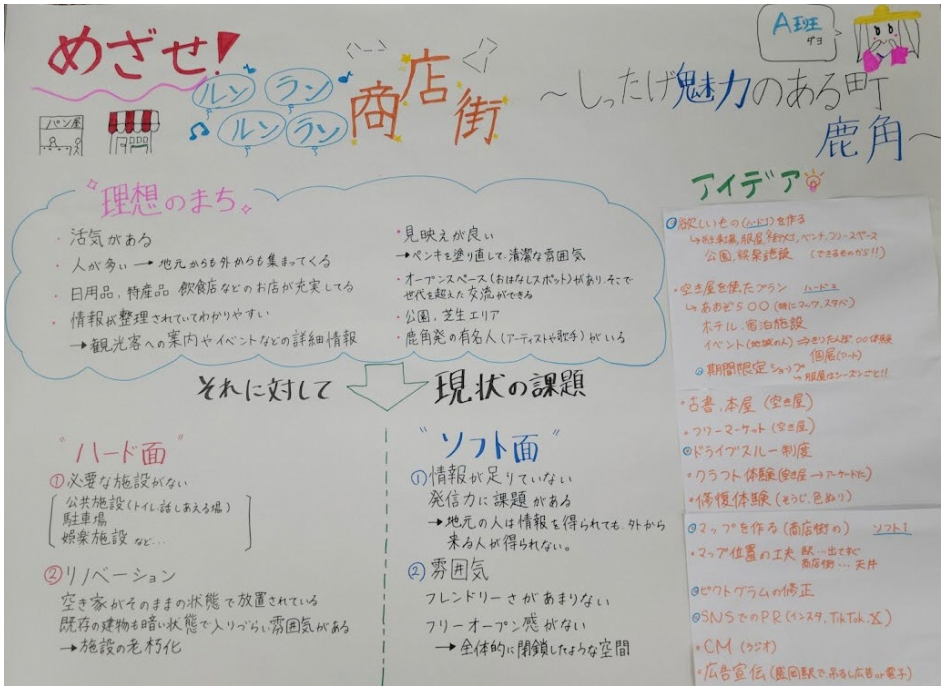
これまでの鹿角市の中高生及び武蔵野大学の学生による調査、ワークショップにより、定住意向の向上に向けた課題がクリアになり、さらに今回は中心市街地の魅力とその課題、解決策がまとまった。中心市街地の魅力を具体化するアイデアは、以上のとおり多様であるが、キーワードとして中心市街地の空き店舗や空き地、鹿角の特産品、様々な世代の居場所、情報発信力ということでは共通している。

確かに、中心市街地には空き店舗が散見され、鹿角市の特産品を扱っている店舗が少ない。そして歩いている人が少ないことから子供やお年寄りも近寄り難い場所となっている。今回のワークショップから中心市街地の魅力は、ブランド品が購入できる、流行りのファストフードが食べれるなどということではなく、様々な世代の市民の居場所やイベント、鹿角の特産品を買うことができることなどが挙げられた。

来年度の発展ＦＳ「鹿角市中心市街地」では、こうした様々な得られた中心市街地の魅力を具体化するチャレンジをしてみたい。例えば鹿角市のアンテナショップを鹿角市の中心市街地で運営してみる。これまでのアンテナショップは東京の銀座、日本橋など趙広域型商店街に多く見られるが、このアンテナショップを産地でやってみようという試みである。

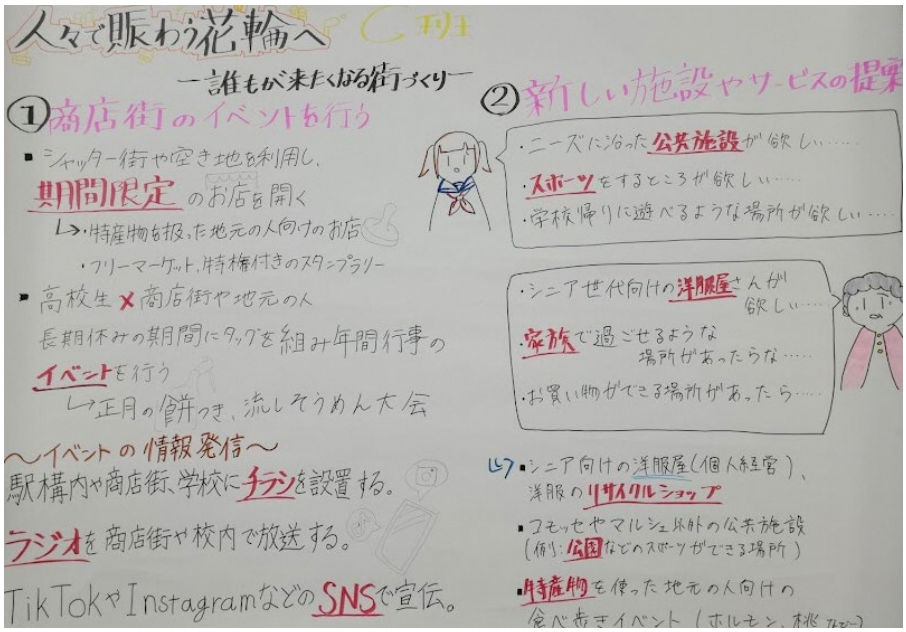
クイックプロトタイピング

A 班

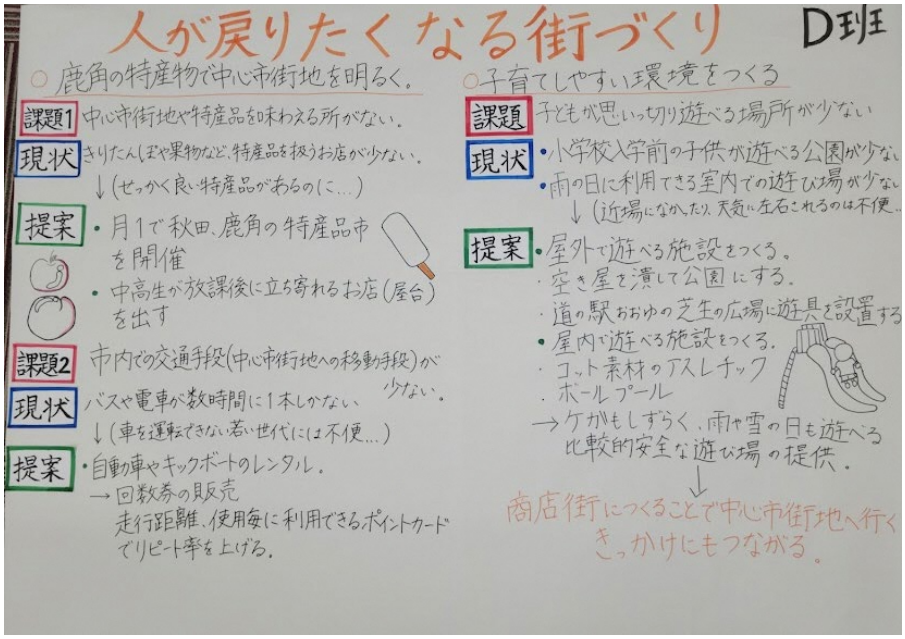


B 班

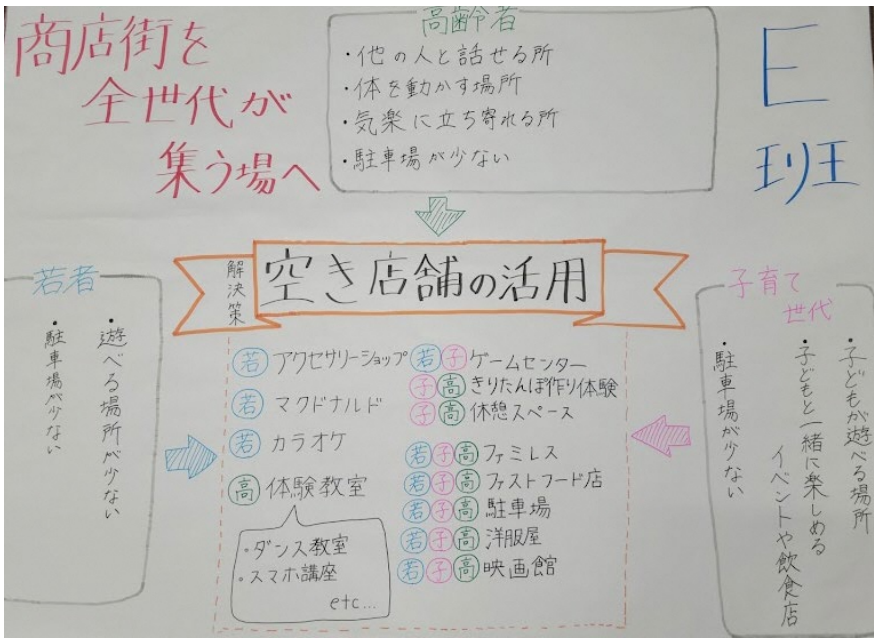
C 班


人々で賑わう花輪へ
C班
―誰もが来たくなる街づくり―
①商店街のイベントを行う
▪シャッター街や空き地を利用し、
期間限定のお店を開く
↳・特産物を扱った地元の人向けのお店
・フリーマーケット、特権付きのスタンプラリー
▪高校生×商店街や地元の人
長期休みの期間にタッグを組み年間行事の
イベントを行う
↳正月の餅つき、流しそうめん大会
～イベントの情報発信～
駅構内や商店街、学校にチラシを設置する。
ラジオを商店街や校内で放送する。
TikTokやInstagramなどのSNSで宣伝。
②新しい施設やサービスの提案
・ニーズに沿った公共施設が欲しい……
・スポーツをするところが欲しい……
・学校帰りに遊べるような場所が欲しい……
・シニア世代向けの洋服屋さんが欲しい……
・家族で過ごせるような場所があったらな……
・お買い物ができる場所があったら……
↳▪シニア向けの洋服屋(個人経営)、
洋服のリサイクルショップ
▪コモッセやマルシェ以外の公共施設
(例:公園などのスポーツができる場所)
▪特産物を使った地元の人向けの

D 班


人が戻りたくなる街づくり
D班
○鹿角の特産物で中心市街地を明るく。
課題1 中心市街地や特産品を味わえる所がない。
現状 さりたんぼや果物など、特産品を扱うお店が少ない。
↓(せっかく良い特産品があるのに…)
提案 ・月1で秋田、鹿角の特産品市を開催
・中高生が放課後に立ち寄れるお店(屋台)を出す
課題2 市内での交通手段(中心市街地への移動手段)が少ない。
現状 バスや電車が数時間に1本しかない
↓(車を運転できない若い世代には不便…)
提案 ・自動車やキックボードのレンタル。
→回数券の販売
走行距離、使用毎に利用できるポイントカードでリピート率を上げる。
○子育てしやすい環境をつくる
課題 子どもが思いっ切り遊べる場所が少ない
現状 ・小学校入学前の子供が遊べる公園が少ない
・雨の日に利用できる室内での遊び場が少ない
↓(近場になかったり、天気に左右されるのは不便…)
提案 ・屋外で遊べる施設をつくる。
・空き屋を潰して公園にする。
・道の駅おおゆの芝生の広場に遊具を設置する
・屋内で遊べる施設をつくる。
・コット素材のアスレチック
・ボールプール
→ケガもしずらく、雨や雪の日も遊べる比較的安全な遊び場の提供。
↓
商店街につくることで中心市街地へ行くきっかけにもつながる。

E 班



12. 今回のプログラムに参加して

12.1　大学生のレポート

地域創生に向けた中心市街地活性化に伴う市民の方々の声

武蔵野大学文学部日本文学文化学科 2 年　奥田春

今回、地域創生のために鹿角市を訪れ、市民の方々にインタビューした中で、2 点気づいたことがある。1 つ目は地域創生に伴う中心市街地の活性化を必要と感じる人が少ない点、2 つ目は、地域創生のために鹿角市に必要な物や施設を尋ねた際、自分とは離れた年齢層に必要なものを回答された方が多いという点である。地域創生のための活動や取り組みに協力させてもらうのは今回が初めての体験で、直接市民の方々の意見を聞く機会を頂いたことによって新しい発見や考え方を持つことができた。

1 つ目の中心市街地の活性化に必要性を感じない人が多いという点は、インタビューを始めて序盤に気がついた。地域創生を目標として鹿角市に来た私には、中心市街地を盛り上げることが絶対条件という固定概念があり、視野が狭くなっていた。地元の人ならではの意見として「人が少なくとも昔ながらのお店が並ぶ商店街や駅前の大通りはそれでこその良さがある」という声が多くあがり、流行を取り入れるなどして新たに人を呼び込むだけでなく、今いる市民の方々が地元から出たくないと思える街づくりを、地元の良さを PR することに焦点を当てるという考えを持つことができた。

2 つ目の鹿角市に欲しい施設が自分と離れた年齢層の人たちに焦点を当てているという点は高齢者に多く見られた。病院へのバスの本数を増やして欲しい、コモッセで行われる定期検診の案内が欲しいなどの意見もあったが、1 番多く見られたのは小さい子供の遊べる施

設を作るべきという声だった。ママ世代においても子供が遊べる室内施設が欲しいと言う意見が多く、こういった施設の創設は里帰り出産や若い世代の地元離れを防ぐには対策のひとつとして大きな影響を与えるのではと感じた。地域創生のために必要な施設を尋ねるインタビューであったが、自分の子供や孫世代のことを考えて答えてくださる市民の方々は 60 代以降で、5 年後の鹿角市では市民の半数を占める年代となる。地域を盛り上げるための意見として自分の切望より他の人を優先して考えられる方が多くいることに感動と、鹿角市の地域創生が可能という絶対的自信が湧いてきた。

この 2 つの鹿角市民の方々の声を聞いて、皆自分たちが住んでいる街に誇りを持っていると感じた。初めて街を訪れた私たちの意見も意外性があったり、外から見てこそ気づくこともあるだろうが、やはり中で生活している市民の声を 1 番大きく反映させるべきだと考えており、その方々が強い地元愛を持っていることに安心し、いい街だと改めて感じた。また、そういった温かい街の人と関わりをもてたことでこのプログラムに参加してよかったと思えた。今は中心市街地と呼ばれる商店街や駅前の大通りに人が少なく課題も残るが、コモッセでのイベントや鹿角市全体でのお祭りも開催されており、住民の方々の根強い気持ちがあれば、今ある魅力を大々的にアピールすることと人口の減少を食い止めることによる地域創生は可能だと感じた。

鹿角市の方々の人柄の良さ

武蔵野大学文学部日本文学文化学科 2 年　押田怜奈

私は、鹿角市の方々の人柄の良さに感動した。私が現在住んでいる中野区では、鹿角市のような人柄が良く、温かい人があまりいないと思う。同じ日本に住んでいて、なぜこのような人柄の良さに違いがでるのか。鹿角市の人たちはなぜこんなに人柄が良いのか。私はその理由を述べていこうと思う。

私が鹿角市に着いてから、1 番に思ったのが鹿角の方々の人柄の良さだ。駅に着いてから職員さんが手際良く荷物を車に乗せてくださったり、まちなかオフィスに行くまでの時間商店街の街並みを紹介してくれたりと、初めからフレンドリーに接してくださり、何も知らない鹿角市で 1 週間過ごしていくのが不安だった気持ちが一気になくなり、楽しみな気持ちになった。また、2 日目に行った駅伝のお手伝いでは、駅伝の選手たちが暑い中快適に過ごすことが出来るように鹿角市に住んでいる人が団結して動いていたり、地域の行事を盛り上げようとしている姿に感動した。

そして、私たちにもなにを手伝ったら良いのか丁寧に教えてくださったり、水をくれたりと気遣いがとてもあって、これも人柄の良さだなと思った。

私は、鹿角市の人に関わるたびに人柄が良いなと感じ、また鹿角市の人たちはいつも楽しそうで仲が良いと感じた。

仲が良いのも、鹿角市の魅力の一つだと思うし、駅伝の行事のように、一つの行事をみんなで全力で盛り上げようとすることで、人柄の良さが生まれているのではないか

と思った。私が住んでいる中野区では、鹿角市のように行事を盛り上げようとするところが、住んでいる私ですらなんの行事があるのか知らない。しかし鹿角市の方々は、住んでいる全員が行事を把握している。中野区にはない鹿角市の人柄の良さがあるのもその辺が関連しているのではないかと思った。

今回鹿角市で 1 週間過ごしてみて、沢山の学びを得たが、私が人柄の良さが 1 番印象に残った。私が住んでいる中野区も、鹿角市のように人柄が良い区にしていきたいと、鹿角市で 1 週間過ごしてみて思ったし、今回の学びのテーマである地域活性化をしていくなかで 1 番重要なことは、人柄の良さなのかなと私は思った。

発展 FS「鹿角中心市街地」実施レポート

武蔵野大学文学部日本文学文化学科 2 年　伊藤楓

1．はじめに

今回鹿角市において、そこでの現状・課題を知り、解決策を提案した。その過程で、実際に現地に赴きインタビューを行ったり、地元の中高生と意見を交わしたり、解決策を提案したりと貴重な体験をした。そこで学んだこと、気づいたこと、そしてそれを今後にどう生かすのか、本レポートでは述べていきたいと思う。

２．本論

住民の鹿角市に対する思いや要望、課題を知るために、街頭インタビューを行った。実際に会ってインタビューするのは初めての経験だったが、本題だけでなく少し雑談を交えることでより深く住民の市への思いなどが聞けたと思う。ただ、雑談を交えてしまうことによって本来聞きたかった事とずれてしまったり、インタビュー一人当たりの時間が多くかかりすぎてしまったりなど反省点も多々見えた。またインタビューの際には、決まった質問のみするのではなく、話しているうちに思いついた質問や、深掘りできそうな返答が出てきたらすぐに質問し、想定以上の答えを得ることができた。

地元の中高生との交流については、まず鹿角市の課題として若者の人口が減っていることがあげられていたので、実際にその世代と交流できたのはとてもよかった。十数人と交流したが、みなそれぞれ地元について考えており、住んでいるからこそ分かる鹿角の魅力や課題、それの解決策案はとても参考になった。また、一緒に活動し仲を深めることで自分たちにも鹿角への愛着がわき、より一層身を入れて鹿角市について考えることができた。

解決策を考える際には、インタビュー結果などから一番重要な課題（早急に解決しなければならない課題）を分析し、具体的に、かつ実現可能な解決策を考えるのはとても大変だった。特に、実現可能で現実的な策を考案するのは難しく、誰がそれをやるのか、費用はどうするのか、どのようにＰＲしていくのかなど考えなければならないことが多くあった。

３．結論

今回はたくさんの経験をしたが、現地訪問やインタビューを通してそこの現状・課題を知り実現可能な解決策を考えるというのはなかなかできない経験であり、ここで学んだインタビューの知識、インタビューや統計などからそこの課題を読み取る力、課題から実限可能な解決策を提案するという経験は就職し社会に出たときに使えるものであり、今回出た反省点をしっかり復習して今後に生かしたいと思う。

発展 FS「鹿角中心市街地」実施レポート

武蔵野大学グローバル学部
日本語コミュニケーション学科 3 年 谷本琴美

1. 発展 FS「鹿角市中心市街地」について

今回の発展 FS の現地プログラムは､8 月 6 日から 13 日の計 8 日間で行われました。初めの 2 日間では、歴史民俗資料館や尾去沢鉱山に行き、鹿角はどういった町だったのか、どのように発展していったのか、など鹿角の歴史について学びました。また、鹿角地区で古くから行われてきた、十和田八幡平駅伝のボランティア活動にも参加しました。そして、いよいよ 3 日目から現地の中高生と一緒に行うプログラ ムが開始され、4 日目・5 日目は、チームごとに分かれ、様々な場所で、地元の方を対象とした街頭インタビューを行いました。そして、6 日目には、今回のプログラムのメインとなるワークショップが行われ、中心市街地を盛り上げていくためのアイデアを考えていきました。そして、7 日目にこれまでみんなで考えてきた成果を、市長さんや地元の方に発表し、自分たちの考えやアイデアの共有を行いました。8 日間とても内容が濃く、充実したものだったと感じました。

2. 今回のプログラムを通して

2.1 自己目標

今回のプログラムに参加するにあたって、私は自分の中でいくつかの目標を立てていました。その中で、今回のプログラムにおいて、1 番の軸となっていた目標は、地元の人との交流を深め、和の中に入る経験をするというものです。せっかく現地に行くなら、その場でしか出来ないような経験をしたいと考えていたし、よそ者の自分たちをここまで受け入れてくれて、さらに、多くの人が私たちに期待をしてくれているというのは、とても光栄なことだと思います。そこで、その機会を無駄にしたくないなというところから、このような目標を立てました。

2.2.気付きや学び得たこと

この 8 日間を通して、鹿角の人たちの意識の高さは素晴らしいなと感じました。街頭インタビューを行なった際に、老若男女問わず多くの方が、それぞれ自分の考えや鹿角に対する意見を持っていました。それだけではなく、そういった自分の考えや意見をきちんと言葉にして伝え、外に発信するというところも含めて、とても尊敬できるなと感じました。また、鹿角の未来を明るいものにするために、「わげもの塾」 などのワーク

ショップが定期的に開催されていることや、市民だけではなく、市の役員の方まで参加され ていたことに、大変驚きました。鹿角で暮らす地元の人みんなが、自分ごととして、鹿角の活性化という問題を捉えていて、地域内で協力し合い、課題解決に挑む姿勢は、地方創生において重要なものであると考えました。つい最近、山口県の萩周辺に旅行に行ったのですが、そこと比べても鹿角の中心市街地は比較的賑わっているように思います。萩も昔は多くの人が生活をしていて、とても栄えていました。しかし、人が流動してしまい、賑わっていた当時の街並みだけが残されている状況です。萩も鹿角もどちらも似たような状況ではありますが、やはり鹿角の方が地元の方たちが主体となって、様々な事業を行い、衰退していってる現状の解決を目指しているように感じました。また、自分が事前に立てた目標を実践していく中で、自分も鹿角の課題解決を自分ごととして、捉えていることに気がつきました。中心市街地について自分ならどのように感じ、考えるか、今の自分が鹿角をもっと活性化させるために出来ることはなにか、などをワークショップの時間だけではなく、行き帰りの時や街を散策しているときに、自然と考えていました。日々の生活の中から鹿角の観光資源を見つけ出し、アイデアを考え、貢献したいという思いが自然と芽生えていました。

3. 今後に生かすために

今回のプログラムを通して、現場の大切さを知ることができました。憶測やネットの情報ではなく、実際にそこで生活して、過ごしている人たちの考えや思いは、どんな情報よりも価値があり、大事にしなくてはいけないことだとわかりました。今後は、観光に携わる所に就職をするつもりでいます。その際には、現場で働くにしても、裏方で働くにしても、常に自分の言動が届く人のことを想像して、主体的に行動していきたいなと思います。そのためにも、今回の発展 FS で経験したことを忘れないようにします。

人と人のつながり

武蔵野大学法学部政治学科 3 年　篠原董

1　人の大切さ

普段の日常では感じにくいが、7 泊 8 日を通じ、様々なところで人の大切さを改めて知った。また、zoom や SNS などの媒体を使って人と関わることが増えた今、直接人とかかわることの重要さにも気づくことができた。

2　大切だと感じた理由

2.1　インタビューを通じて

街頭インタビューを行った際、様々な世代の人と話すことができた。インタビューを行う上で、「飲食店や買い物できる場所よりも、人と人が交流できる機会が少ない」といった意見が多く集まった。また、中心市街の魅力といえば、「人が多く集まり、にぎわっているというイメージ」という意見が多く出た。これらを踏まえ、中心市街地の活性化は人がどれだけ集められ、どれだけ行動をしてくれるかがポイントになっていると考えた。さ

らに、同じメンバーの地元の高校生が呼びかけをしてくれたことで、インタビューに協力して下さった方もいらしたため、普段からたくさんの人と関係を持つことで、助けてくれると感じた。インタビュー中に訪れた喫茶店では、お客さんが多く、困っていた店員のお手伝いとして、親戚の高校生が手伝っていたシーンもあった。

2.2　市の職員の方と通じて

私自身、市役所で働くことに興味があったため、市の職員と話すことが多かった。その中で、市役所で働きたかった理由を尋ねると、市の活性化という課題に自分たちで解決案を考え、生まれ育った鹿角市に貢献できるからといった鹿角市に対する熱い思いを感じることができた。また、鹿角市をどう活性化するか困難にぶつかった際、いろいろとアドバイスをしてくださり、事前に作ってくださった資料からだけでは読み取れないことも教えてくださった。

2.3　祭りを通じて

鹿角市に訪れた時期が花輪ねぷたと重なっていたため、インタビュー中や市の職員などの地元の方全体を通じて、祭りに対する熱い思いを感じた。私自身は、そこまで祭りに興味はなかったが、実際に太鼓を奏でたり声を出して盛り上げる姿を見て、人のすごさを感じた。

３　鹿角市の人たちとつながりを得て

上記 3 点から人と直接かかわる重要さを改めて感じ、今関係を持っている人はもちろん、新しく関わる人達とも関係を深めていきたいと感じた。社会に出ても新しく関係を築くことは重要なため、積極的に行動することを心掛けたい。

発展 FS「鹿角中心市街地」実施レポート

武蔵野大学法学部政治学科 3 年　高田遼

今回の発展 FS の鹿角市の調査では、街の中心市街地の活性化をテーマに進めていきました。その中で普段体験することのないことや、思いもしなかった部分がたくさん見られた。

まず、盛岡市から高速バスを利用し、鹿角市に行ったが行く途中には一面に自然が広がっていて普段大学に通っていると見られない光景に感動しました。特に多いと感じたのは田んぼでした。きりたんぽが秋田で有名なのも納得いく量で、こういったところから、自然を生かしたイベントや、お米をメインにした特産品やお土産などを増やすのも市街地の活性化につながると感じました。

また、何日か滞在して、地域のお祭りもいくつか見学しその中でとても魅力を感じました。花輪ねぷた祭りは、自分の住んでいる関東圏では見たことのない行事で、もっと周りにアピールするべきと感じました。現地に行かなくとも YouTube などで見ることができるが、実際に見ると、その緊張感や、熱気など五感にて味わうとさらに迫力を増すと感じました。この行事の課題として、交通手段の不足が考えられます。例えば、地方では主な交通手段として、自動車があげられます。しかし、会場のそばには、駐車場は見当たらなく、道の駅のし

か見当たりませんでした。また、電車は終電の時間が早く祭りが盛り上がる 9 時ごろには終電はなくなっていました。そういった交通手段も大きな課題の一つと感じました。

また、大きな活動として街頭インタビューを行いました。その中で特に目についたのは、現状に満足しているといった回答が目立ちました。そのような結果から今のままの静かな街並みを好んでいるといった結果がわかりました。そのため無理に活性化させて人を集める必要はないと感じました。その中でも街の人がより快適に過ごせる、といった部分に焦点を当てて、発表資料を作りました。子育てしやすい環境と、鹿角市市民が中心市街地に行ける交通手段といったところに焦点を当てました。子育ては、室内の遊び場や、駅近くに子供を預ける場所などをもうける。交通手段は、若く車を使えない世代がレンタル自転車や電動キックボード、などが上がりました。

こういった課題を解決することで、より暮らしやすく、自然と出ていった人たちが戻って来たいと感じる街になっていくのではないかと感じました。

発展 FS「鹿角中心市街地」実施レポート

武蔵野大学法学部政治学科 3 年　加納莉央

1.　まちづくり

日本の総人口は、2008 年の 1 億 2808 万人をピークに減少局面に転じており、 国勢調査結果では、東京圏等を除く 38 道府県で減少となった。 鹿角市も減少スピードが加速してきており、地域社会の維持に大きな影響が懸念されている。 持続可能な地域社会を維持していくためには、人口構造の若返りが欠かせない。そこで今回の活動では、鹿角市が現在どのような課題を抱えており、どのような対策が必要なのか考えた。そこでワークショップの大切さを学んだ。

2.　ワールドカフェ

今回の活動を通して、ワールドカフェはまちづくりにおいて重要であると感じた。理由は、参加型の対話とアイデアの共有を通じて、幅広い関係者の意見が集まり、まちづくりにおける地域活性化のビジョンを築くことが出来ると考えたからである。異なる視点を持つ人々が集まり、自由な意見交換が行われることで、地域の課題や機会を深く理解し、共通の目標を見つけ出すことができる。このプロセスによって、より効果的で魅力的なまちづくりが実現されると感じた。

3.　まとめ

まちづくりは、地域の住民や関係者の意見やニーズを反映させることが重要である。ワールドカフェは、異なる背景や専門知識を持つ人々が集まり、自由な形式で意見を交換する機会である。これによって、多様な視点を収集し、まちづくりの方向性をより根拠のあるものにすることができる。私は将来地方公務員として自分の地元やその周辺の地域のまちづくりに携わりたいと考えている。そのためこのような経験は、将来携わる地域の課題の発見やその解決策を考える手段として、今後の活動に活かしたい。

鹿角市での発展 FS で学び、気づいたこと

武蔵野大学法学部政治学科２年　間中俊輝

今回参加した発展 FS では、鹿角市の中心市街地にお邪魔させていただき、中心市街地の活性化を図るための具体的なビジネスプランを提案した。一週間の活動の中で中心市街地の魅力や課題に触れ、それを踏まえて地元の中高生と協力して作業に取り組んだ。その中で、私自身が今回の活動を通して学んだことや気づいたこと、今後に活かしたいと思った経験がいくつもあった。

今回の秋田県鹿角市の中心市街地での活動で学んだことの１つ目は、大衆にわかりやすく簡潔に伝えるための発表の難しさだ。大学の授業でも発表・プレゼンテーションをすることはあるが、一般の市民や地方行政に携わっている人たちの前で発表をするというのは初めての経験であった。だからこそ自身の成長につながる非常に大きな経験になったなと感じている。しかし、その分反省点も多く見つかったなと個人的には考えている。模造紙にポスターを作ったが、他の班の発表を見ていても思ったし、自身の班の完成品を見ても思ったのは、文字を無駄に書きすぎないほうが伝わるなという点だ。これはスライドの資料にも言えることだが、書いてあるものを読むだけでは大して意味がないと感じた。言葉で伝えるべきなのはあくまでもスライドや模造紙に書いてある内容の詳しい部分、大衆が見るだけでは理解できない部分を補填するような発表の仕方が有効なのだと気づいた。これは今後の大学の授業でも活用できるスキルだし、社会に出てからでも使うことのできるスキルだからこそ、今回学び、気づいたことを今後に活かしていきたい。

次に学んだことは、誰もが地域（地元）の活性化や発展を望んでいるわけではないということである。この事実は私自身が実際に中心市街地でアンケートを実施した時に知ったことだが、個人的にはかなり衝撃的だった。東京の大学生を呼び地域の活性化に協力してもらうという活動をして、市民の方々もアンケートに協力的であったことから、勝手に地域の活性化を大いに望んでいると考えていた。しかし、アンケートに協力していただいた市民の方の中に「そこまで鹿角市の活性化を望んではいない」と回答されている方がいたのには驚いた。そう思う理由を尋ねてみると「田舎ならではの落ち着いた感じのほうがいい」といった意見が挙がった。この意見を聞けていなかったら今回の気づきは経験できていなかった。自身の固定概念や偏った考え方に執着するのではなく、広い視野を持って色々な意見があるということを念頭に置いておくことの重要性を学び、気づくことができた。この考え方は今後も忘れないように生活し、今後に活かせるようにしていきたい。

最後は、市民の方たちの地域を活性化させようという意思が低かったなという点である。地域の活性化には行政機関の努力が大切であることは言うまでもないが、地域・市民の方々の協力や行政機関との意思の疎通がとても重要なのではないかと考えている。そんな中で、今回の自分たちに協力していただいた役所の方々の地域を良くしようという熱意

は感じた。しかし、市民の方々にアンケートを取っていると市役所の人たちとの熱量に大きな差があると感じた。当然、市民と行政機関が同じ熱量であることの方が珍しいだろう。だが、アンケートでは「中心市街地にはそこまでのことを求めていない」といった声が多く挙がった。ここまで差があると中心市街地を発展させることが正解なのだろうかと感じる部分もあった。ここでの学んだことや気づきは一つ前のものと似ているが、こういった根本原因を考えるといったことや、こういった考えを持つ市民にどう理解してもらうかというのは非常に重要なことであるということを学ぶことができた。

今回の発展 FS では秋田県鹿角市の中心市街地で活動した。その中で学び、気づき、今後に活かせることについて考えた。「大衆が見るだけでは理解でいない部分を補填するような発表の仕方」「広い視野を持って色々な意見があるということを念頭に置いておくことの重要性」「根本原因を考えるといったことや、考えを市民にどう理解してもらうか」以上の 3 つが私にとっては大きな学び、気づき、今後に活かそうと思えるものになった。今回の経験を今後に活用できるように生活していきたい。

発展 FS「鹿角中心市街地」実施レポート

武蔵野大学経済学部経済学科 2 年　柳樂貴一

あらゆる地域で行われているお祭りはその地域の伝統行事と言える。今回、私は、秋田県鹿角市花輪の「ねぷた祭り」を見た。そこで私は、本レポートでは鹿角市花輪のお祭りで得た気づきや学び、それをどう今後に生かすのかを取り上げる。

私は、秋田県鹿角市花輪に 7 泊 8 日で滞在した。「ねぷた祭り」はそのうちの 2 日目と 3 日目は、屋台や飾りが見られて最も観光客の集まる日だ。初日、教授と私たち学生らは全員で夕食をとり旅館へ帰宅する途中に祭りの練習で私たちと同じ年代の学生らが太鼓を叩いていた。太鼓を叩いていた彼らは私たちにも太鼓を叩かせてくれた。この時は、お祭りの準備期間中だったのだが地域のあちこちで太鼓の音頭がなっていた。実は私の住んでいる地域にも大きなお祭りがある。湘南ひらつか七夕まつりだ。この七夕まつりは、他の地域からもかなりの人数が毎年来て日によっては帰宅時に押し合いながら道を開けてもらう事もザラにある。そんな大規模なお祭りならたくさんの若者や地域の方が協力していると思うだろう。答えは No だ。私たちの地域では全然地域の人が一丸として取り組む姿勢は見えなかった。おそらく役所の方々が一丸となって頑張っているのだろう。特に人口を増やしたいなど目的がない我々はそれを傍観する。私が行った取り組みは小学校の時にクラスで書いた短冊が飾られるくらいだろう。だが鹿角市花輪の彼らは違う。地元の学生の多くがお祭りの準備や練習に参加している。以前、鹿角市花輪の学生に話を聞いたら「鹿角市花輪にはあまり遊び場とかはないけどお祭りが盛り上がってそれにより足を運ぶ人が増えてほしい」と言っていた。鹿角市花輪の学生たちは自分たちがお祭りに積極的に参加をして地域を盛り上げる積極性と行動力が強く感じた。これほどお祭りや自分たちの地域を盛り上げるために積極的に行動する学生が集まる地域を私は初めて見た。

お祭りという文化は多くの地域で行われている。だが鹿角市花輪のように自分たち(若者が主体)で一致団結して盛り上げる地域はそうそうない。私は彼らから積極性と行動する事の大切さに気付かされた。人口が減っていく自分たちの地域をいかに盛り上げるかを彼らなりに考え積極的に多くの学生が行動する。これを実際に行おうとしても大抵の人は動かず傍観するだけで終わる。私は、今後彼らのように積極的に行動して歩みたいと思った。

中高生が戻ってきたくなる街にするために ~4 つの観点から考える~

武蔵野大学経営学部経営学科 4 年 片平理子

１．総論

戻ってきたくなる鹿角市まちづくりをするためには中高生が帰ってきたくなる理由が必要だ。また、帰ってくるためには地元を誇りに思うことが大事だ。私は事前学習や 1 週間の現地滞在、インタビューやワークショップを通し鹿角市には 4 つのことが必要だと考えた。1 つ目に働き口があること、2 つ目に自分の街に誇りを持ち、そして好きであること、3 つ目に地域に外部の人を呼ぶための工夫をすること、4 つ目に通過点ではなく目的になる街にすることだと感じた。本論ではより詳細に述べていく。

２．秋田県鹿角市に行って感じた実態

2-1 働き口があること

今回中高生に今後の進路を尋ねたり、商店街にいた高齢者と話している中で、中高生がこの街から出ていく理由に働き口の少なさが挙げられることがわかった。このまちにいてもやりたい仕事がない、そもそも仕事の種類も少ないと話していた。例えば大学で東京に上京し、その後 U ターンしても仕事がないということが生じてしまう。働き口がないと戻ってきても十分な生活費を稼ぐことができない。鹿角市を人が戻ってくる街にしたいのならば、中高生が働きたいと思える職種が必要だと感じた。

2-2 自分の街に誇りを持ち、そして好きであること

街頭インタビューで街の人に意見を聞く中、街について魅力がないと答えている人がちらほら見られた。街が好きな人が増えると、その街は活性化するということを聞いたことがある。私の感覚かもしれないが、鹿角市の方たちはシビックプライドが低いように感じた。シビックプライドとは、地域への誇りや愛着のことだ。郷土愛とは少しニュアンスが異なり、自分自身が地域の構成員であることを自覚してさらに街をよくしていこう、という意志のことだ。シビックプライドが高まれば、自分の街を人に紹介したいという思いが生まれたり、自分の街で何ができるのかを考える人が自ずと増えていくと考える。

2-3 地域に呼ぶための工夫

私は今回行くまで鹿角市を知らなかった。ねぷた祭りといえば青森、牛タンといえば仙台、このように知名度を獲得して、まちに興味を持つ人を増やすことが重要であると考える。世界遺産が 4 つあり、自然が綺麗で、きりたんぽの発祥地であるが、街の外で

は知られていない。〇〇で有名な鹿角市になることで、自分の街を誇りに思えて地域住民の意識も変わってくると思った。

2-4 目的となる街

道の駅あんとらあで行ったインタビューが印象的であった。ここの道の駅の利用者には地元住民、帰省、鹿角を通過点として利用する観光客の共存が３パターンあった。この３つのパターンはどれも鹿角市に来ることを主な目的にしていない。それぞれ他の目的を達成するために手段として道の駅に立ち寄っている。鹿角に来る目的を作る、または関係人口が滞在できるためのシェアハウスを作るなど工夫ができたら良いと思った。

３．結論

中高生が戻りたくなる鹿角市にするためには、鹿角市の知名度を上げて街に誇りを持ち、地域に呼ぶための工夫が必要だと考える。町が有名になると、自分の街を知ってもらえる機会が増え、鹿角を目的として来る人が増える。街の知名度や観光客の存在が市民のシビックプライドにつながれば、好循環のサイクルが起こると私は思う。良いサイクルを起こすためにまずは、街の人が自分の街を知り自分の街に自意識を持って自発的に動いていくことが必要だと考える。都会に住む私たちができることとしては、鹿角で感じたことを口コミや SNS を通じて発信することだ。

秋田県鹿角市の現状と学びについて

武蔵野大学経営学部経営学科３年　長谷川大和

1.　はじめに

武蔵野大学発展 FS「秋田県鹿角市中心市街地活性化」プログラムを通して「参加して得た気づきや、学びと、それをどのように今後活かすか」についてのレポート。

プログラムを通して「鹿角市の魅力を外部に発信しきれていない」と強く感じ、表題のテーマを設定した。魅力と課題、ワークショップで提案した PR 手法を改めて記し、その学びを述べる。

2.　鹿角市の魅力および課題

７日間のワークショップを通して、以下の鹿角市の魅力と課題を挙げる。

魅力

・伝統文化

・地理的な利点

課題

・中心市街地のシャッター街化

2.2　魅力とその概要

・伝統文化

秋田県鹿角市の主な伝統文化は「花輪ばやし」「花輪ねぷた」「毛馬内盆踊り」などが

挙げられる。特に花輪ばやしは、ユネスコ世界無形文化遺産・国重要無形民俗文化財に登録されており、「日本三大ばやし」のひとつに数えられている。

その他の行事も地域住民が半年以上の準備を経て行われ、観光客にとっても迫力のあるものである。伝統文化以外にも食文化も魅力の一つであり、「きりたんぽ」や「いぶりがっこ」など鹿角市発祥の特産品や名産品も充実している。

・地理的な利点

道の駅「あんとらあ」のインタビューを通して、北海道や青森の道中に立ち寄ったという観光客が多くいた。大都市圏の道中に秋田県鹿角市があり、アクセスが良いことが分かる。観光客が道中で鹿角市にふらっと立ち寄り、上記の文化を知ることで魅力の周知につながる可能性は大いにある。しかし道の駅での滞在時間はとても短く、アクセスの良さを活かしきれていない。その理由は次項の「課題とその概要」にて述べる。

2.3　課題とその概要

・中心市街地のシャッター街化

インタビューにて、北海道などに行く道中に鹿角市に立ち寄る観光客は一定数存在することが分かった。しかし、その多くが「道の駅付近に気になる施設が少ない」「シャッターで閉ざされていて、気軽に立ち寄ろうと思えない」などの意見を持ち、鹿角市の滞在時間が短い。さらにシャッター街が増えたことの影響は、観光客のみにとどまらず、地元住民にも及ぶ。かつては中心市街地のみで生活用品が揃い、病院などの施設もあり、生活インフラが充実していた。しかし現在は商店街の多くが閉まり、病院が移転したことにより隣町に出かける必要がある。公共交通機関も充実しておらず、多くの住民は自動車を利用せざるを得ない。自動車がないと困るという意見も多くあった。

3.　PR 手法

上記の魅力を活かしながら課題を解決する案として、「商店街をプラットフォーム化し、イベントを通して出店を促す」を提案した。商店街を用いて定期的にイベントを行い、町の人や県外の人が気軽に出店できる体制を整える。商店街を歩行者天国にして臨時バスを走らせることで、より多くの人々の参加を促す。さらに、学生インターンとして運営人材を誘致することで、準備の負担が大きいという地元住民の負担を軽減し、インターン生にとっても運営者目線で伝統文化に触れることができる利点を生み出す。イベントを実施することにより企業や観光客に参加をしてもらい、そこから街を知ることで魅力が分かり、町を好きになることで、またイベントに参加してもらえるという好循環が生まれると考える。この施策を通じて商店街に活気が生まれ、商店街や中心市街地の活性化につながるのではないか。

4.　ワークショップで得た学び

ワークショップを進める中で、伝統行事に対する考え方がわれわれとは異なると強く感じた。多くの地元住民や中高生は、地元の伝統文化に誇りを持ち、当たり前のように祭りの運営に携わっている。さらに小学校など教育の場面でも、祭神へのあいさつと

言われる「サンサ」の掛け声を学んでいると知った。鹿角市全体が文化を重んじていて、語り継ごうとしている。この全体的な意識が全国的に有名な文化を創出し、ユネスコ無形文化遺産など形ある結果に表れたのだと感じた。私はこのプログラムを通して鹿角市の発展に寄与したいと思い、上記の施策を提案した。しかし、かつては鉱山資源で栄えた鹿角市が、閉山を機に地域住民の人口が減少したように、単なる利点を追い求める施策だけでは一時的な効果に過ぎない。ビジネス視点だけではなく江戸から続く歴史の本質を考え、守っていく姿勢こそ持続可能な発展につながると考える。特に、今回ともにワークショップを行った中高生からこの姿勢を学び、このような考えに至った。私たち地元住民以外の人間が歴史に関心を持ち、私たちなりの視点で発信していくことが求められるのではないか。

インタビュー調査から感じた中心市街地活性化の課題と提言
－住民と行政に視点を置いて－

武蔵野大学工学部環境システム学科４年　谷沢香凜

１．序論

私は、発展 FS のプログラムの中で「街頭インタビュー」が１番気づきや学びを得られた体験であったと感じる。年代や居住地の異なる様々な人に同じ質問を投げかけると、皆んなが口を揃えて同じ回答を述べることもあれば、人によって異なる回答も見られた。このインタビュー調査を通して、鹿角の中心市街地を知る 1 番のきっかけとなり、同時に行政や住民に対する中心市街地活性化の課題も見えてきた。今回の事後学習レポートでは、インタビュー調査から感じた中心市街地活性化の課題を、行政や住民に視点を置いて述べることにする。

２．本論

インタビュー調査から感じた中心市街地活性化の課題は２つある。

1 つ目は、住民の意識改革が必要であることだ。インタビュー調査では、「ここまで廃れていると、今更活性化しようという気持ちにならない」「住民の気持ちとエネルギーが足りない」等の声が上がった。これらの声を聞いて、私たち外部の人間が活性化しようと奮起していても、その地域の人々の問題意識と彼らのまちに対する熱い思いがなければ、中心市街地の活性化は厳しいのではないかと考える。私たちが地域の人に「はたらきかけ」ることはできるとしても、実際に活性化事業の中心を担い、この先も住み続ける地域住民の強い意思がないと、活性化事業は成立しない。来年で完結する 3 カ年プログラムで次に繋げる成果を残すために、「地域住民に働きかけるにはどうすればよいか」を考えてプログラムを進めていくと良いのではないか。

一方で、中心市街地の魅力を感じている地域住民もいる。ただ、彼らは「魅力はたくさんあるのに、地域住民にあまり知られていない」「観光アピールが下手」と述べている。他にも、「鹿角市はライザップと提携を結んでいるが、費用が高くて利用者が少な

い」「施設をリニューアルしたにもかかわらず、リニューアル前の方が良かったと答える住民がいる」等、地域関係者からこのような声を聞き、行政側にも改善すべき点があるのではないかと感じた。そこで２つ目に、行政は、効率かつ有効的な政策を行う必要があることを挙げる。市の政策に充てられる費用には限りがあるため、住民のためになる政策は何かを考えて方策を練り、時には取捨選択もしなければならない。政策に充てるお金を無駄にせず、住民やまちに還元される仕組みづくりが必要である。

３．結論

このように、鹿角市の中心市街地活性化事業を成功させるためには、住民の意識改革や行政の政策の見直しが前提として必要になると考える。私はこの発展 FS 含む 3 カ年プログラムの重要な 1 年に参画し、このプログラムを未来に繋げる最初の１歩として成功させたいと強く思った。そのために私ができることは、本プログラムで得た気づきや学びを来年参加する生徒たちに伝え、活かしてもらうことだ。残り 1 年となったプログラムも、やり方や視点次第で、十分成果を残し鹿角市に影響を与えることができると思う。来年はもう卒業しているので発展 FS を履修することができないが、実りあるプログラムとして締め括れるよう、陰ながら応援している。

実家は鹿角、だからまたこの街に帰ってきたくなる
―発展 FS「鹿角市中心市街地」に参加してー

武蔵野大学工学部環境システム学科２年 林利咲

1. はじめに

「FS の行き先は秋田県鹿角市に決まりました！」これを聞き申し込んだは良いものの、どこだかわからず、そもそも読み方すらもわからず、急いでネットで検索した人も多いのではないだろうか。しかしいざ実際に訪れると、初めてきたのになぜだか少し懐かしい、気のせいか私自身はうっすらそんな印象を受けた。その秘訣はずばり現地の人に隠されているのではないか。このレポートでは、鹿角の人の人柄に焦点を当てつつ、FS「鹿角中心市街地」に参加して、現地の方々と交流する中で得た気づきや学びとそれを今後どう生かすかについて詳細を以下にまとめる。

2. 本論

2.1 鹿角に訪れて気づいたこと、感じたこと

私は昨年の FS の際に初めて鹿角に訪れた。その時は右も左もわからない、全く知らない土地だったのにも関わらず、なぜか懐かしさを感じたのを覚えている。しかし、それがヨコハマのパフェやクリームソーダのおかげか、ホテル鹿角のハワイアンな制服だからか、Queen の内装が昭和レトロな雰囲気だからなのか、懐かしさを感じたのか、昨年の実習だけではわからなかった。それでも、懐かしさと、ホッとする街の雰囲気を感じたのを覚えている。もう、訪れることはないのだろうなと思っていたが、結局なぜか今年も来てしまった。

しかし、今年きてみてはっきりとわかったことがある。それは、その懐かしさの秘訣は鹿角の人の人柄にあるということだ。全く違うと土地からきた私たちなのに、武蔵野大学生だとわかると挨拶してくれた。また、昨年の FS でお世話になった方々も街ですれ違うと、声をかけてくださった。初めてお話した際は、目が合わない方が多く、鹿角の方は少しシャイな方が多いのかなという印象を受けたが、２回目会えた時などは笑顔で話してくださる方が多かった。打ち解けることができたように感じ、鹿角の方々の人柄の良さを知ることができた。一緒に活動してくれた高校生も、同じように打ち解けると段々と意見を言ってくれるようになった。このようにこんな素敵な方々で構成されていることから街全体がアットホームな雰囲気だということ、さらにみんなあたたかく「おかえり」と迎え入れてくれることから、懐かしさを感じたのだと考えた。ある人は「あんたの実家だと思ってまた帰ってきなさい。鹿角の家族なのだから。」と言ってくれた。ここから私は、この人柄の良さ、寛大さ、そして温かさが鹿角の最大の良さだと学んだ。昨年の先輩方の「おかえりが響く街」は本当だった。

2.2　学びから考えた３つのこと

これらの学びから私は３つのことを考えた。一つ目は、U ターン促進に力を入れることの大切さである。進学先がないため一旦ほとんどの若者は出ていく、離れた若者側へも今の鹿角の様子がわかるように定期的に情報を伝えることで地元を身近に思ってもらい、U ターンの体制を整えることで帰ってきやすい状況と環境を作る。これがおかえりが響く街だからこそできることだと考えた。ではどのような情報を定期的に伝えることが良いのだろうか。考えたことの２つ目は、現地密着型の広報である。若者に伝える情報だけでなく、観光で訪れた人ようのパンフレットなどは、基本どこの観光地でも、綺麗な景色の写真や美化されたものが多い。初めてそこに訪れるときはそれで良いかもしれない。しかし、「またいきたいなー」ともう一回リピーターとして訪れたいと感じる時は大体、美味しいものを見てお腹が空いてまた食べたくなった時と懐かしい人に会いたくなった時ではないだろうか。だから、懐かしさを感じ、なんだか安心する、鹿角の人の人柄を活かせるようなありのままの鹿角を写した写真や、「道の駅では高いけど今日は八百屋さんの店頭で北限の桃を安売りしてます」「料理がいつ出てくるかわからない喫茶店、今日は速くて何分でした」「今日は何時から何時に食堂に看板犬のワンちゃん出没します！」など、「あーこれ鹿角あるあるだよね。」とクスッと笑えて身近に感じられる情報を発信することが良いのではないかと考えた。他の観光地と同じように被せに行くのではなく、ありのままの鹿角の素敵さを発信することが大切なのだと感じた。考えたことの３つ目は自分の街に誇りを持ってもらうということだ。街の自慢といえばみんな口をそろえて変に数日間の祭りの話をする。その他のことを聞こうとすると、大半の人が「よくこんななんもないところに来てくれたね。」という。しかし鹿角は日本屈指のエネルギー自給率であり、祭り以外にもすごいものが沢山ある。それでも地元の人は意外に知らないということがわかった。そのため、地元の人が鹿角の魅力やすごいところを再認識する機会を設けることが必要だと考えた。このように、鹿角の方々の素

敵な人柄に加え、自信と誇りを持ってもらうことでさらにいきいきとする。そのありのままの様子を広報し、発信する。そうすることで、就職や進学で一度鹿角を離れた若者たちも、客観的に地元の魅力をもう一度見ることができ、帰ってきたくなるはず。これにより U ターンを加速させる。現地の方々の人柄の良さという魅力に焦点を当てることでこのようなムーブメントを起こすことができると実習での学びから考えた。

2.3　どう今後に生かすか

私は実際に鹿角に訪れて、現地の人と交流したからこそ、現地の人の人柄の良さという鹿角の魅力に気が付くことができた。これは、いくらネットで調べても、いくらパンフレットで綺麗な写真を見てもわからなかったことだと考える。そのため、このつながりを途切れさせないように大切にすることはもちろん、ぜひまた鹿角に訪れたい、帰ってきたい。そして次は、家族や友達と一緒に鹿角を訪れることでより多くの人に鹿角の魅力に気がついてもらえるきっかけを作っていきたい。

3.　終わりに

本レポートでは、「懐かしさ」「人柄」「おかえりが響く街」の 3 つをキーワードに私が FS に参加して得た気づきや学び、そこから考えたことをまとめた。これらを今後に活かせるように鹿角家の家族として継続的に関わっていきたいと考える。

都心と地方の街並みと暮らし方

武蔵野大学工学部建築デザイン学科 2 年　竹田結

1.　はじめに

鹿角市で 1 週間過ごしてみて東京での暮らしや街並みと違うと感じる部分が多くあった。自分が大学で建築を専攻していて街並みや街全体のランドスケープについて興味があるため、都心と地方の暮らし方の違いによるそれぞれのメリット・デメリットを考えていきたい。このレポートで扱う都心とは自分が現在住んでいる東京都の新宿あたりを指し、地方は FS で訪れた鹿角市の花輪地域とする。

2-1　都心の街並みと暮らし方

私が住んでいる東京都の街並みは、利用できる敷地を目いっぱい使い大きなビルや商業施設、集合住宅が立ち並んでいる。私の住んでいる東京都の調布市も駅を降りたら映画館やパルコなどの商業施設が多く存在する。住宅も戸建てよりもマンションやアパートなどの集合住宅が多く建てられている。それによって、人々の暮らし方も影響する。例えば何か買い物に行く時も八百屋や魚屋ではなくデパートや大型スーパーに行き食材や日用品、衣服の買い物を済ませる。また、都心にある公園の多くはボール遊びや手持ち花火が禁止されている。そのため、子供たちは思うように体を動かせずにゲームなどに走ってしまう傾向があると感じる。

2-2　地方の街並みと暮らし方

秋田県鹿角市の街並みは、非常に開けていて開放感のある街だと感じた。都心は高い建物

が多いのに対し、地方は 4 階以上の建物がほとんどない。そのため地上を歩いて上を見上げた時の空の面積が広く、風通しが全体的に良く気持ちよい街だと感じた。
暮らし方も都心とは異なる。商店街の中にある小さな八百屋や商店などに出向いて買い物をする。また、使われていない敷地も多く子供たちはそこで自由にのびのびと遊ぶことができる。都心に比べ娯楽施設が少ないため地域との交流が盛んだと感じた。
3, これからの地方の街の在り方
　都心に住む私から見れば地方の街並みは非常に魅力的に感じる。その一方で現地に住んでいる人たちは都心の利便さに憧れを抱いている。その両方を共存させていくにはどうした良いのだろうか。そこで一つ考えたことがある。私は都心にはない地方の街の景観に魅力を感じている。しかし現地の人は街の中身の利便さに不便さを感じている。外観は現在の街並みを残しながら誘致する店舗や施設を少しずつ増やしていけたらよいと考える。そうすれば、地元の人と観光で訪れる人の双方が魅力に感じる街が創られていくと感じた。

12.2　中高生の感想、気づき等

今回のプログラムに参加して

秋田県立花輪高等学校 3 年　泉山　健太

　私が今回参加したプログラムで気づいたことは、意外と鹿角市民鹿角の率直な魅力がマイナスなことの意見が多かったことだ。県外からきた人たちにもインタビューをしたところ、自然が豊かだとか人柄がいい、などプラスの意見が多かった。地元に住んでいる人は、地元の良さについて気づいていないことにも気づいた。また、地元の人にインタビューをしたところ、そもそもどこが鹿角市の中心市街地がどこかわからないという人もいた。このことから自分も含めて鹿角市の良さや魅力がわからなかったり、鹿角市の課題や問題点をそのままにしていることがわかった。昔から鹿角で暮らしている人によると昔の鹿角は人数がとても多く高校でも 1 学年 6 以上のクラスがあったという。他にも鹿角市には映画館やゲームセンターなどがあったらしい。それほど鹿角市は賑わっていた。しかし今は人口も減り、色々な店もなくなってきてしまっている。鹿角市自体がなくなってしまわないために、自分自身が祭りに参加して伝統を残し、鹿角市の課題をそのままにせず、昔のように賑わってほしいと思う。

今回のプログラムに参加して

秋田県立花輪高等学校 3 年　根本将之介

　私は今回のプログラムに参加して鹿角市の良さについて再確認することができました。街頭インタビューをしたとき、市民の方々のほとんどが今の鹿角市は昔に比べて活気がなくなったと言っていました。しかし、現在でも良いところはあり例えば、花輪のお祭りは昔ほどの活気はないが県外から参加する人や外国人の方が参加するなど、さまざまな人々も参加してくれていて鹿角市を知ってもらえるようになって嬉しい、と言っていたことが印

象に残っています。その他にも、鹿角の人はとても思いやりのある人が多いと気づけた。それは普段過ごしている私たちは気づくことができず、大学生の方々じゃないと気づけないと思いました。私たちは普段から、地域の人の優しさが当たり前になっていてそれがここ鹿角の良さであるということに気づくことができました。私は将来的には鹿角に戻ってこようと思っているので、今回得たことを活かして地域の活性化に繋げていきたいと考えています。

今回のプログラムに参加して

秋田県立花輪高等学校３年　根本竜之介

私がこのプログラムに参加して学んだことは、「地域を活性化させるためには一筋縄ではいかない」ということです。

プログラムに参加する前までは「大きな商業施設を作る」、「駅前を賑やかにする」などの私たち若者が集まれる場所、娯楽施設を創ることで街の活性化に近づくと思いました。しかし、これだけだと、その場限りの対策になることを知り、持続性がなく、いずれは人が集まらないことも知りました。何より、地域の色を使わないと意味がないと思いました。特産物を使ったプロジェクト、鹿角にしかないものを使って造った施設の方がより地域の活性化に近づけると、学んだプログラムでした。

これから、自分たちが町のために何ができるかもう一度深く考え、地域が発展していけるよう行動していきたいです。

今回のプログラムに参加して

秋田県立花輪高等学校２年　浅水　春華

本プログラムに参加し、私が得た気づきが一点あります。それは、自分が予想していた以上に「鹿角市民は鹿角に興味がある」ということです。一見当たり前のようにも思えますが、そのような鹿角についての興味、具体的には魅力や課題、理想像等の些細な意見や本音が生かされている場はなかなか無いのではないかと感じました。私たち学生は今回のプログラムのように地域を観察したり、意見を生み出す機会がありますが、社会人になった時、そのような機会は激減し、強い意志を持った限られた人しか行動に起こせないのが現状だと感じます。将来私が大学生、社会人になった際に今のように地域を観察し、自分の意見を持つことはもちろん、市民の意見と実際の地域・生活の壁を超えることができるような「架け橋」的存在の仕組みの実現について考え続けることで、実際の地域やそもそもの地域行政の在り方によい変化をもたらすことができればよいと思います。

今回のプログラムに参加して

秋田県立花輪高等学校２年　川上ひかる

高齢者や若者、子育て世代によって鹿角に求めているものが変わってくるため、商店街の

空き店舗に各世代のニーズに合わせたお店を入れるなどといった活用をすれば、多くの人が集まり鹿角の活性化にも繋がると思った。ぜひ実現してほしい。

アンケートや鹿角に馴染みのない大学生の話を聞いて、自分が気づかなかった鹿角の魅力や誇れる部分を知ることができた。将来、鹿角を出て都会で就職すると言う友達からは、「鹿角には何も無いから。」「都会はなんでも揃っているから。」といった話をよく耳にするが、その人たちは鹿角の魅力を本当に知っているのか、何も無い訳ではなく何も知らないのではないか、と思う。ぜひその人たちにも鹿角の素晴らしい魅力や誇れるところを知ってほしいと思った。

私は今年から鹿角広報室の一員として活動しているため、かづの未来アカデミー創造事業での活動や気づいたことをもとに、鹿角の魅力を多くの人に知ってもらう企画を考えたり活動したりしていきたいと思った。

今回のプログラムに参加して

秋田県立大館鳳鳴高等学校　安保　美優

私は高校に入ってから市外に出ることが増え、鹿角市に感じたのは活気がないことである。隣の市なのに活気の差があるのは鹿角市には店が少なく、人が集まらないからだと思っていた。しかし今回、街頭インタビューをしてみて店などがないからだけではなく、観光物などの今、鹿角市が持っているものをうまく活用できていないという課題もあるということが分かった。こういった新たな気づきから、今、無いものに目を向けるのではなく、今、あるものに目を向け、どのように活用させて良い方向に持っていくかを考えることが大切だと感じた。

今後、生活していくなかで「今あるものを良い方向にもっていく」ということを心がけていきたいと思った。今回の経験から得られたものを今後の生活で生かしていくために、今まで以上に周りを見て、広い視野で生活していこうと思う。

今回のプログラムに参加して

秋田県立十和田高等学校１年　高瀬 千晶

今回かづの未来アカデミーに参加して武蔵野大学の大学生の皆様から見て鹿角に足りないものは何なのかや地元の人が思っている鹿角の中心市街地に足りないものは何なのかを知ることが出来ました。そしてその足りないものを補うにはどうすればいいのかを商店街の空き家に注目して考えることが出来ました。しかし今回考えたことを実現していくには資金も人手も交通機関も足りていないことがわかりました。このことから鹿角を盛り上げるにはまず最初に資金不足の改善をしていくことが課題だと考えました。資金不足を改善し開業支援などをしていくことで開業者が増え、商店街の復興に繋がるのではないかと思いました。また支援などをしていくことによって人手不足の改善にも繋がるのではないかと考えました。このように 1 つずつ課題を解決していき鹿角を盛り上げていけたらいいな

と思いました。まだ私は学生で具体的なことをすることはできませんが将来少しでも鹿角に貢献出来たらいいなと思いました。

今回のプログラムに参加して

鹿角市立十和田中学校３年　田中　風月

私はこのプログラムに参加して、鹿角のこれからについて真剣に考えられる機会になったので良かったと思う。大学生とともに地元について考える機会などほとんどないので楽しかった。中心市街地についての話を一日目にしっかり説明してくれたため具体的なプログラムの内容を理解でき、その後の進行が分かりやすかった。フィールドワークやワールドカフェなど意見を取り入れて深める時間がたくさんあったので、それを壁新聞制作の時などに自分がもっと生かせればとは感じた。かなり大学生の方たちが率先して役割を引き受けてくださったため、私にあまりできることは少なかったが案を出したり文字や絵をかいたりでは貢献できたと思う。私は割と地域活性のイベントに参加させてもらうことが多いのだが、今回のプログラムで以前より地域や活性化について深く知ることができた。今後もイベントに参加させてもらう機会があると思うが、その時にここで培った経験や知識を生かしたいと思う。

今回のプログラムに参加して

鹿角市立八幡平中学校３年　海沼　実羽

私達の学校ではボランティアガイドがあるのでインタビューで得た鹿角市の良い所を観光客にアピールしていけたらいいと思う。

昨年よりも自分的には自主性がついたと思う。これから鹿角市の活性化に繋がるイベントやプログラムがあったら参加していきたい。

インタビューを通して地元の方などが鹿角市をどのように思っているのかがわかった。

今回のプログラムに参加して

鹿角市立十和田中学校２年　成田　裕帆

今回のプログラムに参加してみて、鹿角には魅力がある。でも、それが市外の人たちに伝えられていないということに気付きました。街頭インタビュー中、「鹿角って花輪ばやしとりんご、桃、そのほかに何があるの？」という方がいらっしゃいました。その質問に対して、「ほかには花輪ねぷたとか、毛馬内盆踊りとか、大日堂舞楽ですね。食べ物でいくとブルーベリー、おそば、ホルモン、色々美味しいものがありますよ。」と返答しました。市外の人からしてみれば、代表的な名物以外は知らない人が多いのだと知りました。代表的な名物以外にも鹿角の名物はたくさんあるのだと知ってもらうためには、SNS・インターネット・フリーペーパー・果物狩り等のパンフレットが効果物ではないかと考えました。今回のプログラムでは、進路選択を考えたときに「鹿角に戻ってきて鹿角を発信する」という新しい選択肢ができました。今後の進路選択に生かしていきたいと思いました。